

健康教育プロジェクトの歩み

(2002年～)

健康教育P長 上野山 小百合

1. 2002年4月に健康教育P結成

2002年1月大阪支部の新春講演は、健康教育がテーマで榊原さんの熱い講演でした。講演の背景には、2002年度から小学校中学年から保健教科書の導入、総合的な時間開始があり、中河内ブロックでも黒井さんが健康教育に力を入れようと主張されていました。榊原さんの講演を聞いて、健康教育をやってみたいと、中河内ブロックの倉窪さん、大津さん、上野山がすぐに健康教育の実践を始めました。みんな初心者でしたから、榊原さんが牽引役で丁寧に関わってくださいました。学習会もIT化し、支部HPに「健康教育掲示板」を作成してもらい、授業の構想段階の教材研究に始まり、授業が始まると毎時間の実践中継をし（もちろん文字で）、それに対して書き込みをしてネット上で毎日、深夜学習会をしていました。書き込みが長すぎて読むのがしんどいという苦情も寄せられましたが、実践者にはとても貴重なアイテムでした。

そうやって行った3本の実践が、とても充実していたので、健康教育の魅力にはまり、健康教育プロジェクトを発足して、集団研究と実践の普及を行ってきました。

2. 呼ばれたお座敷は断らない！

大津さんと上野山が「師匠」と呼んでいた榊原さんの「呼ばれたお座敷は断るな」の教えを守り、二人ともたくさんのお座敷（実践報告）をこなしました。他支部の例会や官制研究会、組合教研、学会など積極的に報告しました。そして実践を通じて多くの方と繋がり、実践者が少しずつ増えていきました。それが、自費出版の実践集『どこでもドア』I

～IIIやいかだ社『こどもが動き出す授業作り』の発行に繋がりました。

3. 基礎学習もコツコツと！

実践には、学習が必要不可欠です。教材研究のためにも色々学びました。泉南のアスベスト工場跡、福島、水俣などにも取材に行きましたが、社会情勢・発達・障害理解などの基礎学習もコツコツとやってきました。2004年2月から始めた「ヴィゴツキー学習会」は、一人では読めない難しいテキストを何年もかけて読み、こどもたちの実態と結びつけて議論しながらヴィゴツキーの理論を学んでいます。これは、コロナ禍になった今もオンラインで月1回続けています。オンラインになったので、遠隔地からの参加もあります。

4. コロナ禍に新型コロナ実践で大ブレイク

大阪の実践が全国に広がり、大阪のメンバーが全国健康教育分科会の世話人をするようになりました。しかし、2019年夏の全国大会の健康教育分科会では、ここ数年の参加者が非常に少なくなり、分科会の成立がピンチだと次期分科会責任者の窪田さんが研究局に訴えました。これは、学校の教育困難さの現れではないかと分析しました。学力テストの成績アップなどの締め付けが加速され、こどもたちの実態を見て教科書にない授業の構想を考えて行うような健康教育の実践がやりにくくなっているのが、原因の1つだと思ったのです。教員の仕事は多忙化を極め、自由な教育ができなくなっています。それに追い打ちをかける新型コロナ流行による不自由な環境は、教育困難を一層すすめました。「コロナ禍だからこそ対話の授業で、こどもたちの声を聴いてコロナの実践を」というオンライン分科会会に全国から70名以上の参加者があり、11本の実践報告がされ、実践集を自費出版することになりました。健康教育の対話の授業が、今後も引き継がれていくと思います。